

改選後初会合で政策討議

488回常務理事会開く 熊本地震対応も協議

日本私立大学協会(大沼 淳会長)は、五月十三日、東京・市ヶ谷のアルカディア市ヶ谷で、第四八八回の常務理事会を開催した。四月の理事会で新たに選任された常務理事らの初会合となり、同協会の政策協議が行われた。また、熊本・大分を中心とする地震による震災対応のさなか、同協会九州支部からの報告があり、今後の震災対応についての協議も行われた。

開会の挨拶では、大沼と述べた。会長が熊本地震へのお見舞いの言葉と共に「新しく就任された常務理事の皆様を迎えられて頼もしく思う。一八歳人口減、地方と都市との格差、国際情勢の変化という中で我々私立大学は競争にさらされている。全体としての方向性を考慮した上で協力していかなくてはならない。この常務理事会の場でも方向付けを協議していきたい」等

況を中心に、同大キャンパスをはじめとした周辺大学の被害状況について別掲のとおり詳細な報告があった。

特に熊本県下の大学では地震による施設等の損壊が大きいことから、学生の授業への影響が懸念されている。中山支部長は、熊本地震に係る学校施設・設備の完全復旧への支援について、国や県への要望を取りまとめ、大沼会長にその声を届け

た。これに対し、同協会事務局の小出秀文常務理事・事務局長が、全私学連合として四月二十八日に馳 浩文部科学大臣のもとに、災害対応には私立学校についても国公立等と遜色のない国の支援

を要望したことなどの対応状況を説明し、「大沼会長の指示のもと、現場の声は関係方面に強く申し上げる」と述べた。大沼会長は「今後は施設・設備の問題から学生支援への対応が重要となってくる」と理解を示し、同協会本部との連携を密にしたうえで協力体制を約束した。

平成一九年度私立大学関係政府予算要求の基



「常務理事会で方向付けを」と大沼会長。熊本地震対応の協議も行われた

また、政策の中でも注目していることとして、給付型奨学金制度創設について、同協会としてどのように考えていくか協議した。小出事務局長は「機関補助から個人補助への移行が懸念され、その財源をどうするかの問題がある。この点には釘を刺しておきたい」として、機関補助が縮小・削減された場合や、奨学金という制度自体の問題点を示した。

新たな大学政策の構築問題については、「私立大学等の振興に関する

検討会議」に向けた対応等が協議された。同協会の委員である小出事務局長は「地方私大にもエールとなるような声を挙げていきたい。現場目線で私大振興を訴えたいので、ぜひ意見を寄せてほしい」と述べた。

28年熊本地震被害書 中山支部長が報告

「皆様より、お見舞いと共に多大な支援を頂戴していることに感謝申し上げます」

中山支部長は冒頭でそのように述べ、しかしながらいまだに終息しない震災被害の状況を、発生時から克明に報告した。

熊本市の崇城大学では震度六弱ということで、建物の被害が相当に上った。地震発生後直ちに教職員と学生の安否確認を行ったが、特に学生の安否確認には時間がかかったという。一週間後に、

ようやく全員の無事を確認。五月九日から授業を再開しているが、使える施設もまだあるため平常通りとはいかず、学生に不便をかけている等の状況を説明した。

さらに、中山支部長は、九州支部加盟校のうち、このたびの地震の震源近くに所在する平成音楽大学が甚大な被害を受けており、建物の損壊が激しく、授業再開が出来ていない(五月十三日時点)と報告。「被災地の学生が一刻も早く授業再

開できるようにしていかなくてはならない」と述べた。

全学体制で学生の教育を安定させることに注力していることを強調したうえで、国からの支援に対しては「学生のことを考えたならば、教育条件や環境に国公私立の差があつてはならない」と述べた。最後に「我々が預かる学生は将来の日本、地域を担っていく人材。この震災を乗り越えて逞しめる者として育てていかなくてはならない」とその責務を述べて締めくくった。

自ら被災しながらも支援

熊本地震で
崇城大の学生

ボランティア活動で汗

崇城大学（中山峰男学
長、熊本市西区）では多
くの学生が「平成二十八
年度熊本地震」の避難所
でボランティア活動に取
り組んだ。自ら被災しな
がらも、困っている被災

者を支援しようと、地震
発生時から県内のいたる
ところで避難者をサポー
トしている。
「熊本地震」は今日に
至るまで大きな余震が相
次ぎ、家屋の倒壊や土砂

災害など、各地に甚大な
被害をもたらしている。
崇城大学でも、この大地
震の影響により五月八日
までの間、一斉休校とな
った。こうした中、同大
の学生たちは自ら被災し

ながらも被災者を支援し
ようとボランティア活動
に取り組んできた。
地震発生時から一時避
難所となった熊本市立井
芹中学校（熊本市西区）
では、宮城さん、田中さ
ん（ともに宇宙航空シス
テム工学科 航空整備学
専攻四年）ら約一五人の
在学生が、多い時で約一
五〇〇人の避難者をサポ
ート。県外から届く物資

の支給や配布、管理を行
った。地震発生直後は物
資が足りず、一族にお
にぎり一個しか渡せない
ときもあったという。
現在、避難者は井芹中
から別の場所に移ってい
るが、水道が止まったと
きはプールの水をバケツ
リレーで運んだり、毎日
タンクに湧水を汲みに行
くなど、水の確保が大変
だったと話す。

ボランティア活動を行
う学生の多くは「自宅が
無事だったので、目の前
の困っている人たちを助
けたい」との思いで始め
たという。
「自分たちの目で見て
何をしたらいいか、どん
な助けが必要かを考え活
動しました」と話す彼ら
の生き生きとした姿は、
避難所にいる人たちの元
気に繋がっているようだ

つた。
文徳高等学校（熊本市
西区）の体育館では、徳
永さん（応用生命科学科
一年）と手嶋さん（同学
科二年）がボランティア
に取り組んだ。手嶋さん
は実家が福岡のため、避
難所にと泊まり込み
で活動。また、徳永さん
は益城町にある実家が全
壊し大変な状況にありな
がらも、文徳高校の生徒
たちや先生と協力し、多
い時で約一二〇人の避難
者をサポートした。